

日本の精神分析における「甘え」理論の展開と臨床実践

境 明穂

1. はじめに

精神科医であり精神分析家である土居健郎(1920-2009)は、「甘え」という日常語を用いて日本人ないし人間の心性を理解しようとした。土居の一連の提唱は、〈「甘え」理論〉ないしは〈「甘え」概念〉と呼ばれ、1971年に出版された『「甘え」の構造』を中心に社会現象となった。社会的な反響だけでなく、学術的にもその影響は大きく、土居が主に活動していた精神分析や精神医学を含む周縁の他領域においても「甘え」が広く用いられてきた。

土居がどのようにして〈「甘え」理論/概念〉の着想およびその重要性を認識するに至ったのかということについては、『「甘え」の構造』(1971)の第1章である「「甘え」の着想」で述べられている。アメリカ留学の際、アメリカ人が日本人のように思いやったり察したりしないことに強いカルチャー・ショックを受けた土居は、アメリカ人患者と日本人患者の心理の違いを絶えず考え、帰国後は日本語を使って日本人の心性を表そうと試みた。その中で「甘え」に行きつき、「甘え」という語が日本語に特有であるということに認識した。

しかし、こうした文脈とは別に〈「甘え」理論〉の構築が可能になった背景として、土居自身の被分析体験をはじめとする精神分析の訓練の存在があったとされている。土居は日本においてもアメリカにおいても教育分析を中断している(土居, 2004)。土居理論の研究者である熊倉(1999)は、日本における精神分析の恩師である古澤平作との決別について触れ、「教育分析には甘えられないという気づきと傷つきが〈甘え〉理論を生んだ」と述べている。また、北山(2010)も両国での教育分析の中断が精神分析への「幻滅」を生み、精神分析あるいはアメリカという対象に「甘えていた」という「転移」や「抵抗」の自己分析が可能になったと論じている。

先のカルチャー・ショックのインパクトは強く、〈「甘え」理論/概念〉は日本人論や比較文化論の文脈で理解されている。しかし、藤山(2010a)はそのような読み方は土居の中心的論点を外した一種の誤読だと述べている。そしてその根拠を、土居が「甘え」という日本語を用いて「あくまで普遍的な人間のこころに迫ろうとした」(藤山, 2010a)ところに見出している。土居自身も「甘え」が「その原初的な人間関係を示唆する故に精神分析の理論構築に恰好の役割を果たす」(土居, 2004)と信じ、「精神分析理論の中に「甘え」をどう位置付けるかということが関心事であった」(土居, 1988)と述べ、精神分析理論としての「甘え」の意義を主張してきた。藤山(2010b)が述べるように精神分析理論は、その理論をめぐる対話がなされることで意味を持ち、位置付けられる。それはその他の理論との対話であり、他の論者との議論という対話でもある。さ

らに、実践から生まれた理論はこうした対話を経て、再び実践へと還元されていく。それでは、この精神分析理論としての〈「甘え」理論/概念〉が土居によって提唱されて以来、どのような対話がなされて、どのような位置づけが試みられてきたのだろうか。また、それらの理論的対話が精神分析臨床実践にどのように影響を与えてきたのだろうか。

本論文は、土居の精神分析理論としてみた〈「甘え」理論/概念〉の展開、つまり土居あるいはそれ以外の人物によって〈「甘え」理論/概念〉がどのように理解され、位置づけられてきたのかを明らかにすることが目的である。その際、〈「甘え」理論/概念〉を巡ってどのような対話がなされてきたのか、そして実践の中にどのように取り入れられてきたのかを中心に検討を行う。

2. 土居による〈「甘え」理論/概念〉の提唱と理解

2-1. 〈「甘え」理論/概念〉とは何か

土居の〈「甘え」理論/概念〉の展開について検討するために、まずは土居が提唱した「甘え」とはどのようなものであるか整理する。

土居(1971)は「甘え」を「人間本来につきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする」と定義した。この定義が曖昧さを伴っていることは土居自身も認めていることであるが(土居, 1988)、そのことは当然批判を呼んだ。特に竹友との議論(1988-1989)の中で土居は、「私は『甘え』が曖昧のままでも一向に困らない」と述べ、多義的で包括的な概念として使用して支障がないとしている。土居は「甘え」について一貫した定義を示していないものの、それぞれの著作や著書の中で〈「甘え」理論/概念〉を構成するいくつかの要素を挙げている。ここでは、定義に焦点を当てることなく、その要素を概観し、土居が〈「甘え」理論/概念〉に組み込んだニュアンスを理解したい。

まず、土居(1971)は、「甘え」の心理的原型が乳児期の母子関係に存すると述べる。胎児に由来する母子未分化の状態から、精神の発達とともに「自分と母親が別の存在であることを知覚し、しかもその別の存在である母親が自分にとって欠くべからざるものであることを感じて母親に密着することを求める」(土居, 1971)ことが「甘え」としてしている。そこには母親との分離を否定し、一体となることを母親が受け入れてくれるだろうと期待する乳児の心理が示されている。

さらに、「甘え」が子どもから養育者に対して向ける感情に限定されるものでなく、それ以外の対人関係の間に起きる同じような感情にも用いられることを土居(1989)は強調する。「成人した後も、新たに人間関係が結ばれる際には少なからずともその端緒において必ず甘えが発動しているといえる」(土居, 1971)と、生涯にわたって人間の健康な精神生活に欠くべからざる役割を「甘え」が担っていることを述べている。

また、「甘え」は相手との一体感を求める欲求や願望・感情だけでなく、愛されたいという欲求が満たされて満足する状態も意味している(土居, 1989)。加えて、「甘え」の感情や状態について考える上で重要なことは、「満たされている時よりも満たされていない場合の方がはっきり要求として認識されやす」という点である(土居, 1989)。土居(1989)が述べるには、「甘え」の感情は伝えるのも受け取るのも非言語的であるし、「一々言葉にすると迎合的にひびき、『甘

え』の願望を台無しにし、その純粋な満足を事実上不可能にする」と、非言語的かつ逆説的な感情であるとした。そして満たされていない状態を表す日本語がいくつも存在しているとして、それらを「屈折した『甘え』 convoluted amae」と呼んだ。それは「子どもっぽく、わがままで、要求がましい」性質を持つもので、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」といった語で示される。一方で、確かな受け手があるものを「素直な『甘え』 primitive amae」と呼び、それが Balint, M.(1952/1999)の「受身的対象愛」に相当するとした(土居,1989)。これは相手に愛されようとすることであり、愛されるという受身的な体験を能動的に求めるものである。そして、土居(1989)は相手次第によって全く違う形で現れるこれら2種類の「甘え」を区別することが、精神的に深い意義を持ち、「甘え」がナルシズムや同一化、アンビバレンス、投影同一化とどのような関係にあるのかを理解しやすくなると述べている。

このように、「甘え」は受け入れてくれることを期待しながら相手との一体感を求める動きであり、乳児期の母子関係においてだけでなく生涯にわたって継続する人間心理の理解のための概念であること、さらには非言語的・逆説的な感情であるという、多義的かつ包括的な概念であるということが分かる。

2-2. 土居健郎の精神分析臨床

それでは、土居はこの「甘え」を用いてどのように精神分析臨床を行っていたのだろうか。

土居が初めて「甘え」という語を用いて、臨床実践について書いたものは「神経質の精神病理—特に「とらわれ」の精神力動について—」(土居, 1958)である。この論文において土居は、神経症者の精神分析的治療を行う中で神経症患者の心理・症状の成り立ちを理解する上で「甘え」が恰好の視点を与えることを指摘した。そこでは患者の対人関係を、彼らが語る過去の対人関係と、治療経過中に治療者に対して示された対人関係から捉えようとしている。そして「甘えたくとも甘えられない心」が神経症患者に特異的な対人関係の基調であり、内心に潜在する甘えたい心が満足されないでいること自体に本質的な問題が存するとしている。

その後、さまざまな精神病理を甘えの観点から考察しようと努め、神経症だけではなく精神病も甘えの病理として理解しようとした。そして、患者が自分の甘えを自覚した後に引き続いて、「自分がなかった」ことに気が付くといった現象が見られたことから、甘えと自分という意識の間に密接な関係が存在することを理解し、それを「「自分」と「甘え」の精神病理」(土居, 1960)の中で論じている。上記「神経質の精神病理」時点では、患者が自身の甘えを完全に自覚すればその時点で神経症が治るだろうと考えていた(土居, 1962)。しかし、当該論文では甘えを自覚した後に引き続いて「今まで自分がなかったという意識」が芽生え「ただひたすら甘えたいという圧倒的な欲望以外には何もなかった」と気づいたことが治療の転回点になった症例が考察されている。

これらの論文は土居の〈「甘え」理論/概念〉の治療的側面を表す基本資料であるが、「甘えたい心」が抑圧され無意識となっているか、無反省に放置されているということが患者の問題であるという土居の理解がうかがえる。その上で、治療者である土居は患者の「甘え」にどのように接していたのだろうか。前節で述べたように、「甘え」は受け取る相手次第で形を変える。「治療状況における医者対患者の関係は、『甘えたい心』を十分に自覚させるとともに、も

はや甘えられないという危機に患者をおいやることによって」(土居, 1960)、治療の進展が可能になったと述べているが、治療者のどのような態度が患者に「甘えたい心」を十分に自覚させ、甘えられないという危機においこんだのかということについては、この2本の著作からは読み取ることができない。

土居の「甘え」にまつわる臨床的姿勢は、のちに以下のようにまとめられている(土居, 1989)。

患者をして精神分析的治療を求めさせる意識的動機がなんにせよ、最も基礎にある無意識の動機は甘えないしはその派生物によるとというのが私の考えである。私は別に分析家が初めから甘えに焦点を当てなくてはならないと言いたいのではない。また甘えをいわば出迎えるように、それを満足させるべく身構えてなくてはならないというのでもない。大事なことは、甘えがそこにあると心得て、それが治療関係の中で十分に展開するのを待つことである。(中略)それこそが転移の核となるものだからだ。

ここでは「甘え」を意識して出迎えたり、焦点づけたり、満足させようとするのではない治療者の態度について述べられている。ここから土居の「甘え」に対する態度が理解できる。そこにある患者の「甘えないしはその派生物」について積極的に焦点づけない治療者の姿が望まれているが、この理由については先に述べた「甘え」が非言語的・逆説的であるという特徴から考えられる。甘えている本人は自分の「甘え」には気が付かない、無意識的な心の動きである。「甘え」を言葉にすれば、その瞬間「台無し」になる。このような特徴からも、土居は「甘えがそこにあると心得て、それが治療関係の中で十分に展開する」ということを治療者に求めたのだと考えられる。

なぜ「甘え」が治療関係の中で十分に展開することを土居は重要だと述べたのだろうか。それは先述したように土居(1960)が治療関係において「甘えたい心を十分に自覚させることにより、もはや甘えられないという危機に患者をおいやる」プロセスを重視し、治療を進展させると考えていたからであろう。そこには「甘え」が「一種の不安定さを秘めて」おり、「甘えの背後には分離についての葛藤と不安が隠れている」という土居(1975)の理解が見える。つまり、「甘え」は向けられた「相手次第」であり、了解され受け入れられると満足を、拒絶されれば怒りや傷つきが待っている。甘えていても、甘えさせてもらえないのではないかという疑いが内に秘められている。その意味で甘えは最も典型的な両価的感情であると言え、その感情が治療の中でワークスルーされることが必要なのだと土居は主張しているのである。

このようにして、土居は〈「甘え」理論/概念〉を用いて、人間の普遍的なところについて考えとともに、精神分析臨床において「甘え」を治療関係の中に見出し、体験することの意義について論じてきた。次章では、こうした土居の「甘え」理論の提唱や理解を受けて、土居やその他の論者によって〈「甘え」理論/概念〉にどのような議論が巻き起こり、展開がもたらされたのかを時代ごとに追っていき、「甘え」の議論の総体を示した上で、日本の精神分析臨床の中でどのように〈「甘え」理論/概念〉が活用されてきたのかを明らかにするべく文献レビューを行う。

3. 「甘え」の理論的展開とその臨床的活用

3-1. 〈「甘え」理論/概念〉の展開

表1 「甘え」理論の発展と「甘え」に関する主な出来事

	土居自身の理論の発展と土居に関する主な出来事	土居周辺や「甘え」に関する出来事
1950年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「甘えること」(1956) ・「神経質の精神病理一特に「とらわれ」の精神力動について」(1958) 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神分析学会創立(1954)
1960年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「『自分』と『甘え』の精神病理」(1960) ・『精神分析研究』「ナルチズムの理論と自己の表象」(1960) ・『精神療法と精神分析』(1961) ・『精神分析研究』「『すまない』と『いけない』一起自我についての考察」(1961) ・「Amae—A Key Concept for Understanding Japanese Personality Structure」(1962) ・『精神分析研究』特別講演「精神分析療法と西欧の間」(1964) ・『精神分析と精神病理』(1965) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『精神分析研究』シンポジウム『甘え(土居)理論をめぐって』(1968) ・古澤平作 逝去(1969)
1970年代	<ul style="list-style-type: none"> ・『「甘え」の構造』(1971) ・『精神医学と精神分析』(1973) ・『「甘え」雑稿』(1975) 	<ul style="list-style-type: none"> ・John Bester(訳)『The Anatomy of Dependence』(1973)
1980年代	<ul style="list-style-type: none"> ・『精神分析研究』「古沢平作先生と日本の精神分析」(1980) ・『「甘え」の周辺』(1987) ・「The concept of amae and its psychoanalytic implications」(1989) ・『思想』竹友安彦氏との誌上討論(1989-1990) ・『「甘え」さまざま』(1989) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『「甘え」理論の研究—精神分析的精神病理学の方法の問題』(熊倉・伊東,1984) ・『精神分析研究』「甘えの二重構造—母子関係理論への提言—」(西園,1988)
1990年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「On the Concept of Amae」(1992) ・「Amae and transference love」(1993) ・『注釈「甘え」の構造』(1993) ・『「甘え」理論と精神分析療法』(1997) ・『精神神経学雑誌』長山恵一氏との誌上討論(1997-1999) ・「Amae and the western concept of love」(1999) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『「甘え」理論と精神療法—臨床における他者理解』(熊倉,1993) ・『Infant Mental Health Journal』「甘えの概念特集号("Special Section, The Concept of Amae")」(1992) ・米国精神分析学会 カンファレンス「〈甘え〉再考("Amae Reconsidered")」(1997) ・日本語臨床研究会『「甘え」について考える』(1999) ・国際精神分析学会コンgres「甘え、東洋と西洋("Amae—East and West")」(1999)
2000年代	<ul style="list-style-type: none"> ・土居健郎選集(2000) ・『精神分析研究』特別講演「漱石と精神分析」(2000) ・『精神分析研究』「精神分析と文化の関連をめぐって」(2004) ・逝去(2009.7.5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『精神分析研究』シンポジウム『甘え、自己愛、日本の治り方-森田療法との対話』(2000)
2010年代		<ul style="list-style-type: none"> ・『精神分析研究』特集「土居健郎先生追悼」(2010) ・『精神分析研究』「『甘え』(土居)と"vitality affects"(Stern)」(小林,2012)
2020年代	<ul style="list-style-type: none"> ・生誕100周年(2020) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『精神分析研究』シンポジウム演題「日本の精神分析的臨床における「甘え」概念について—「日本的」について考える—」(岡田,2022)

土居が理論を展開していくことが可能だったのは〈「甘え」理論/概念〉がさまざまな議論や批判を呼び、それに土居が応答する中で整理されていったという側面があるだろう。〈「甘え」理論/概念〉の展開を整理するために、土居自身の理論的發展と「甘え」に関する主な出来事を表1にまとめた。なお、精神分析界限におけるその發展や展開が見られる主な書籍・論文・出来事に絞って記載した。

土居が初めて日本語で「甘え」について書いたのは1956年「甘えること」であるが、そこから臨床素材を用いて「甘え」の心理を描き出し(土居, 1958, 1960等)、1965年には『「甘え」概念でもって精神分析の理論を再構築するべく』(土居, 2004)、『精神分析と精神病理』を出版している。また、「Amoe—A Key Concept for Understanding Japanese Personality Structure」に代表されるように、国外でも「甘え」という語で日本人を理解することの意義について主張していった。

日本において最初に「甘え」理論についてのシンポジウムが行われたのは1967年の日本精神分析学会第13回大会「甘え理論(土居)をめぐる」である。精神科医や精神分析家からの土居の「甘え」理論に関する問題点や疑問点が提起され、それに対する土居の返答が行われた。例えば、土居が「甘え」を現象記述語として使っていながら、精神力動的概念として用いているのは矛盾ではないか(新福, 1968)などといった、「甘え」理論に関する重要かつ本質的な批判や議論であった。精神分析の立場から、西園は口愛期退行が生じたヒステリーの患者との症例を挙げながら、プレエディパルな諸問題や母子関係といった二者関係の中で「甘え」を考えるべきだと提唱している。小此木は、「甘え」が「相互的退行」を通して人間的な一致の感覚を得る愛情交流の一形式ではないかと述べ、「甘え」の相互作用的な側面を指摘している。

1971年に『「甘え」の構造』が出版され、土居の「甘え」理論が一般にも浸透したと言えるのが1970年代である。『「甘え」の構造』出版から2年後に英語版の『The Anatomy of Dependence』が出版され、国外においても「甘え」理論が認知されていく。

こうした国外への発信という流れの中で1987年に土居がモンリオールで開かれた国際精神分析学会で『「甘え」概念とその精神分析的意義』を発表し、国際学会にデビューした(土居, 1997)こともあり、精神分析の主流に「甘え」理論が認識されることになっていく(藤山, 2010b)。国内では、熊倉・伊東(1984)の甘え理論に関する研究や、『思想』誌上での竹友との議論が行われている。『精神分析研究』においては、西園(1988)が1968年の「甘え理論(土居)をめぐる」で行った母子関係の文脈で「甘え」を見るべきだと再び強調し、「甘え」が臨床に奉仕する理論であって欲しいと期待を寄せている。また、同論文の中で、1980年頃にある書店から「甘え理論—その評価と課題—」という論集の企画があったことが示唆されている。企画は陽の目を見ることがなかったが、このように「甘え」理論誕生からおよそ20年経った1980年代においても再び活発な議論や検討がなされていることが分かる。

1990年代になると、日本および海外における精神分析コミュニティの中で「甘え」に関するパネルやカンファレンスが行われる。1997年5月には米国精神分析学会年次大会において〈甘え〉再考と題したカンファレンスと発表が行われ、1999年にチリで開催された国際精神分析学会コンGRESSにおいても「甘え」のパネルが行われた。日本では日本語臨床研究会による『「甘え」について考える』(北山, 1999)が出版されている。日本的な精神分析理論である「甘え」に注目が集まっていた時代である。

2000年には精神分析学会でシンポジウム「甘え、自己愛、日本的治り方」が行われ、「甘え」を中心とする精神分析的な「治り方」の発表が森田療法と比較して議論されている。また、同年に『土居健郎選集』が出版され、「甘え」理論をはじめとする土居の著作集がまとめられた。さらには、土居(2004)は精神分析学会 50 周年記念号に展望論文を寄稿し、自身が精神分析と文化の関連について述べる時に「甘え」概念を下敷きにしてきたことや、治療者が自身の「甘え」を自覚しておくことが重要であるといったことを述べている。

2009年7月5日、89歳で土居は逝去し、『精神分析研究』(54巻4号)にて追悼特集が組まれた。そこでは、土居の業績に関する討論4本と、個人的・学問的交流を含むエッセイ9本で構成されている。そして、土居の逝去後も頻繁ではないが、「甘え」についての議論は続いている。例えば、小林(2012)の展望論文においては「甘え」理論の臨床的有用性が主張され、日本的な精神分析概念についてのシンポジウム(鈴木・妙木, 2022)の中では岡田(2022)が「甘え」の臨床的使用について述べている。

以上から程度の差こそあれ、「甘え」が時代を問わず繰り返し議論され、その学術的意義や価値を失っていない理論・概念であることが分かる。

3-2. 『精神分析研究』誌における「甘え」を扱った症例

それでは、このような議論が繰り返される〈「甘え」理論/概念〉は実践という観点においてはどのように展開されてきたのだろうか。本節では、臨床実践の中でも精神分析臨床における「甘え」の展開を見る目的のもと、その素材として、日本の精神分析および精神分析臨床について取り上げている最も大きな学術誌である『精神分析研究』を取り上げる。

『精神分析研究』誌上において、2023年5月時点で症例が記載されている論文のうち「甘え」がキーワードとして使われており、それが土居の〈「甘え」理論/概念〉であると考えられた症例が記載されている論文一覧を表2に示す^{1, 2}。

これらすべての論文において、患者に「甘え」の問題が存していると考察されている。土居(1975)が想定していたように「甘え」に対する不満や不安、傷つき、怒り、恐怖が患者の問題となっている。ここで着目したいのは、それらの「甘え」が治療関係の中でどのように現れ、どのように治療者が気が付き、どのように扱われているかということである。

まず、木下(1992)、野々村(1992)は、患者の母子関係や力動的理解において「甘え」を用いているが、治療関係でどのように現れているかについては論文の中では論じられていない。

「甘え」のアンビバレントを治療の中で扱っていく意義について論じているのが中野(1993, 1996)と川名(1997)である。中野(1993)では「母親に対する甘えの不満」を抱え、治療者に過度に同一化しようとする患者との間で、患者が見た夢の解釈から治療が進展する。甘えを裏切ら

¹ 表の「キーワード」については原文のものを引用し、「甘え」について言及がないものを“—”と表記した。また、“文献”については、参考文献において土居への言及があるものを“有”、ないものを“無”とした。

² 斎藤(2005)は「頑張り」と「甘え」がキーワードになっていたが、土居の〈「甘え」理論/概念〉であると判断できなかったため、今回は検討から除いた。権(2007)と小倉(2012)において症例に関して「甘え」の言及があるが、研修症例の助言コメントであるため、治療者からの視点ではないことから表からは除いている。

表2『精神分析研究』における症例において「甘え」を扱った論文一覧

年	巻(号)	執筆者	タイトル	キーワード	文献	種別
1992	35(5)	木下悦子	自己愛人格障害の治療(1)―患者の「特殊な現実」に対する共感的解釈について―	―	有	原著
1992	36(3)	野々村説子	逃避型抑うつ患者の精神分析的な精神療法	―	有	臨床経験
1993	37(2)	中野幹三	甘えと原始的防衛機制―境界分裂病の治療経験より―	甘え	有	原著
1996	40(1)	中野幹三	『壁』と『穴』―ナルシズムの構造体をめぐって―	甘え	有	原著
1997	41(3)	川名典子	心筋梗塞患者における依存をめぐる葛藤	甘え	有	研修症例
2003	47(1)	上別府圭子	母性の再考―父親から虐待を受けた女性と母親―	―	有	原著
2011	55(4)	堀江桂吾	甘えを許容し難い女性との心理療法過程	甘え	無	研修症例
2011	55(4)	吉沢伸一	自己否定の『無限ループ』で苦悩する成人男性との心理療法過程	甘え	有	研修症例
2022	66(4)	蓮井千恵子	察してほしいという男性との中断した面接	甘え	有	研修症例

れることへの傷つきと羨望、甘えの願望といった甘えのアンビバレンスが夢や夢の解釈から理解され、患者が洞察を得て、「自然な甘え」に気づいていったというプロセスを述べている。中野(1996)は精神分析的な精神療法についての症例であり、川名(1997)はリエゾン精神看護師として患者に関わった症例であるが、患者の過去に由来する「甘え」の深い葛藤や傷つきが治療関係の中で破壊的な様相を帯びた「甘え」に変わっていったプロセスが描かれている。そのような破壊的な「甘え」は、治療者の患者に対する陰性感情によって認識される。そのようなプロセスを経て、治療者が破壊的な「甘え」の裏にある怒りや孤独感と「甘え」の願望というアンビバレントを受け止め、包み込んでいくことで、治療の進展が見られたと考察している。

上別府(2003)は母親との身体感覚的な融合感、一体感としての「甘え」を治療者にも求めた患者との心理療法を描いている。そうした「甘え」は患者の治療者を希求する言葉によってではなく、治療者が「全人格を委ねられている」という「重さ」を感じたことによって理解されていった。そうした「甘え」の希求を治療者がどう扱ったのか明確には書いていないが、治療者は患者のそうした身体的密着の希求を、象徴的なかたちで応えるといった方策を練る必要があると考察されている。

一方で、治療者が治療関係に生じていた「甘え」を扱えなかった(扱えていない)と考察しているものが吉沢(2011)、堀江(2011)、蓮井(2022)である。例えば吉沢(2011)は治療進展の膠着感や患者の治療終了の申し出に「甘えが露呈する恐怖や強い恥の感覚、甘えや許しを求めても得られないという怒りや無力感、見捨てられ不安」を見出しているが、「心の底から理解することができなかった。それは私の限界でもあった」と率直に述べている。

4. 臨床的な概念としての「甘え」が抱える問題点

4-1. 〈「甘え」理論/概念〉の構造

ここまで精神分析臨床のなかでも『精神分析研究』において、症例の中で「甘え」がどのように見出され、扱われてきたのかについて概観してきた。3-1 で見たように、〈「甘え」理論/概念〉についてその誕生から多くの議論や批判、検討がなされてきたことから理論的/概念的価値や意義・関心の高さについては伺える。一方で、今回は『精神分析研究』に限ったものになるが、それと比較して臨床実践の中で「甘え」を活用した症例論文が少ないように感じる。この点について、岡田(2022)においても同様の指摘がなされている。

その理由として岡田(2022)は、土居の〈「甘え」理論/概念〉を使用することそれ自体に対する抵抗が、現代の精神分析臨床に携わる人々の中にあるのではないかとこのことを挙げ、問題提起している。その抵抗のひとつに、「土居先生への抵抗」があり、それが「甘えの使用」を妨げているのではないかと述べている。たしかに、土居に直接指導を受けていた藤山直樹も『「甘え」を使わないぞという転移』があったことを語っている(藤山他, 2013)。また、岡田(2022)の問題提起に対して、高野(2022)は当該学会の中で「甘え」がその使いやすさのために拡大解釈されていった過去があり、そこに主に土居門下の人々による指摘が入り、正しい甘えとそうでない甘えという区別が置かれていった結果、使いにくい概念になったのではないかと記憶と印象から述べている。そのような抵抗や触れ難さが現在も残っているのかもしれない。

4-2. 「甘え」に代わるものとしての「甘やかし」「甘ったれ」

一方で、このような土居への抵抗や土居が提唱した理論ゆえの使い難さといった観点だけでなく、〈「甘え」理論/概念〉自体が今日の精神分析にとってどのような意義を持つのかについて考える必要がある。土居が人々や治療の中に「甘え」を見出してから 60 年余り経ち、時代は大きく変わった。土居(2007)は昨今においては「甘え」の心性や理解が失われているのではないかと危惧している。土居(2007)が述べるのは、「甘え」とは似て非なるものとしての「甘やかし」や「甘ったれ」が「甘え」にとって代わってしまったのではないかということである。長(2006)は母子関係において「甘やかし」について、その行為の始まりは甘やかす親の側であり、親から差し出したものを受け取らせようとする使役の面が含まれていると述べる。「甘ったれ」は相手に好意があると思いたいという意図のもと甘えることである(土居, 2007)。「甘え」は相手に受け入れてもらうことを期待しながら、愛されようとする、受身的かつ能動的な体験であった。そこには相手の好意や存在が前提となっている。一方「甘やかし」「甘ったれ」は相手の好意や存在は前提とはなっていない独りよがりなものである。土居(2004)はそれをナルシズム(自己愛)的だと考え、その病理の増大ゆえに精神分析が可能な治療関係を維持できない患者が増えていると主張している。今日の精神分析臨床において出会う患者においては、土居が見出した「甘え」とは違った質の「甘え」の問題を考えなくてはならず、それが「甘え」理論を治療に活用することやその認識を困難にしている可能性が示唆される。

4-3. 逆転移としての「甘え」

また、患者だけでなく治療者も土居が「甘え」について論じていた時代から大きく変化している。そもそも、はじめにでも述べたように「甘え」は治療者としての土居の自己分析から生まれた概念でもあるため、治療者自身について考えないというわけにはいかない。先の『精神分析研究』における2010年以降の論文において、「甘え」の問題が存しており治療関係において生じていることが治療のポイントの一つになっているとは理解しているものの、実際的に扱えていないという反省的考察は、治療者側の要因を示唆していると考えられる。

これについて考えるために、まずは土居自身の「甘え」に対する感覚について触れる。小此木(1999)は1987年の対談を引用して、土居が持つ「甘え」感覚の変遷について触れている。小此木が述べるには、甘え理論の誕生時期、土居が指向する人間像として「西洋的な合理主義・個人主義を確立していく人間像」があった。分離と自立を重んじる立場から、日本人の「甘え」から距離をおいて批判的で「甘えは克服すべきもの」という土居の態度があったのではと述べている。そこから土居自身の甘えに対する主体的背景に変化があり、「甘えの克服から肯定へ」と変遷があったと結論づけている。小此木の指摘に対し、土居(1987)は対談を経て、「甘えを非難したり、否定すること」なく、「自分の中に隠れている甘えに気づく」といった自分の甘えに対する態度について整理できたとしている。

そうした整理を経て、後に土居(2004)は以下のように述べている。

同一化できるということは「甘え」を知っているということである。治療者は自分の「甘え」をわかっているので患者の「甘え」を、たとえそれが単なるほめかしであっても、患者自身はそれを自覚できないでいる場合も、キャッチすることができる。大体「甘え」というものが本来無自覚なのだ。もちろん同一化も同じことである。治療者はしかしそれが自覚できるのでなければならない。無自覚で始まっている「甘え」にせよ同一化にせよ、それを萌芽の状態でもとらせることが肝要である。それでこそ本当の治療者である。

これは、今日の精神分析における治療者の姿勢について述べたものであるが、治療の中で患者の「甘え」を扱うために、治療者が自身の「甘え」を知っておく必要があるということを提言している。自らの「甘え」を自覚するという行為の裏には、「甘え」に関する逆転移を考え、理解しようとする自己分析が必須である。これは、転移-逆転移を重んじる今日の精神分析においては当然のことではあるが、「甘え」についてはそれが容易ではない可能性がある。

西(2022)が述べるように、近代的自己の確立が目指されていた時代、つまり土居が理論構築を行っていた時代においては、「甘え」からの分離と自立といった発達モデルが想定されやすかった。分離や自立を目指しながらも、「甘え」に立脚している自分の在り方を見つめるといった自己分析が比較的行きやすかったといえる。現代はそのような発達モデルが必ずしも想定されているとは言い難い(西, 2022)。さらには「甘え」と言えば、土居(2007)が危惧したようにナルシズム的な「甘え」が連想されやすくなっている。そうした中で自身の「甘え」を吟味することは、治療者にとっても容易なことではないと考えられ、そのことが治療の中で「甘え」に触れることを難しくしているのではないだろうか。

5. おわりに—「甘え」を使用する意義

では、このようにして「甘え」の問題を認識しにくく、治療関係の中で触れられにくい現代で、「甘え」を精神分析臨床において活用しようとすることに意味はあるのだろうか。

筆者は「甘え」が現在もなお臨床的に有用な概念であると考えている。土居は「甘え」に代わり、「甘やかし」や「甘ったれ」というナルシズム的な「甘え」が前面に出ていることを指摘しているが、そうした患者がなぜ相手の好意や存在を前提とせず独りよがりな「甘え」に終始してしまうのかを考える必要があるだろう。それらもまた本来の「甘え」がかなわない代わりにそのようなナルシズム的な「甘え」に身をおかざるを得ない状況なのではないだろうか。いわば、「屈折した『甘え』」(土居, 1989)の一種であり、そこには「甘え」に対する傷つきや怒り、不信がうかがえる。中野(1993, 1996)や川名(1997)が症例の中で見出した甘えのアンビバレンスに目を向け、ワークスルーする姿勢が、そうした「甘やかし」や「甘ったれ」を理解する上で重要なのではないだろうか。それもまた、「甘え」に着目することである。

さらに、自立-分離が必ずしも想定されていない(西, 2022)今、治療者自身の「甘え」の感覚を吟味する難しさがあると述べた。精神分析は複雑で無意識的な心の動きを重視し、患者が自分の心では抱えておけない情緒体験を治療者が自分の心でのもの想い *reverie*(Bion, 1962/2007)の中で受け入れコンテイングしていく。先述の通り、「甘え」は「一種の不安定さを秘めた」「最も典型的な両価的感情」である(土居, 1975)。このような繊細で複雑な感情を治療者自身がもの思ひの中で繰り返し吟味すること、そのこと自体が精神分析臨床における重要かつ必要な作業なのではないだろうか。そうした治療者の作業を含んだ症例の詳細な検討が今後は望まれる。

本論が言及できていないこととして、「甘え」が他の概念や理論に取って代わっているということがある。土居(1993)が性愛を含む転移性恋愛のなかに「甘え」を見出したように、他の概念に内包されて見落としているだけかもしれない。その他「甘え」には「アタッチメント」「依存」などの多くの類似概念があり、混同して使用されやすい。今後はその類似概念や別の理論との差異について検討していくことで、「甘え」が今どこにあるのかということを明確にしていく必要があると考えられる。

また、本論は土居の〈「甘え」理論/概念〉が精神分析臨床の中でどのように活用されているのかを明らかにするという目的のもと、『精神分析研究』に収録されている症例論文に限った検討を行った。はじめにでも述べたように、〈「甘え」理論/概念〉の貢献は精神医学、精神看護、心理臨床など多岐にわたる。それらの領域における臨床実践の中で〈「甘え」理論/概念〉の展開を検討することもまた、臨床概念としての「甘え」を広く理解するために必要である。

6. 文献

Bion, W. (1962a). A theory of thinking. *International Journal of Psychoanalysis*, **43**, 306-310. 中川慎一郎(訳)(2007). 考えることに関する理論. 松木邦裕(監訳) 再考—精神病の精神分析論. 金剛出版, pp. 116-124.

長憲枝(2006). 甘やかし. 北山修(監修). 日常臨床語辞典. 誠信書房, pp. 40-43.

土居健郎(1958). 神経質の精神病理—特に「とらわれ」の精神力学について. 精神神経学雑誌, **60**,

733-741.

- 土居健郎(1960). 「自分」と「甘え」の精神病理. 精神神経学経誌, **62**, 149-162.
- 土居健郎(1961). 精神療法と精神分析. 金子書房.
- Doi, T. (1962). Amai—A Key Concept for Understanding Japanese Personality Structure. In Smith, R. J., Beardsley, R.K.(Eds.). *Japanese Culture: Its Development and Characteristics*. Chicago. Aldile Publ, pp. 1-7.
- 土居健郎(1971). 「甘え」の構造. 弘文堂.
- Doi, T. (1973). *The Anatomy of Dependence*. Translated by John Bester. Kodansha International, distributed by Harper & Row.
- 土居健郎(1975). 「甘え」の構造 補遺. 「甘え」雑稿. 弘文堂, pp. 170-192.
- 土居健郎(1988). 「甘え」理論再考—竹友安彦氏の批判に答える. 思想, **9(771)**, 99-118.
- Doi, T. (1989). The concept of amae and its psychoanalytic implications. *International Review of Psycho-Analysis* **16(3)**, 349-354. 「甘え」概念とその精神分析的意義.(1997). 「甘え」理論と精神分析療法. 金剛出版, pp. 115-125.
- Doi, T. (1993). Amai and transference love. In E. S. Person, A. Hageli, P. Fonagy (Eds.). *On Freud's "Observation on Transference-Love"*. Yale University Press, 165-171. 「甘え」と転移性恋愛.(1997). 「甘え」理論と精神分析療法. 金剛出版, pp. 149-157.
- 土居健郎(2004). 精神分析と文化の関連をめぐって. 精神分析研究, **48(増刊号)**, 85-93.
- 土居健郎(2007). 「甘え」今昔. 「甘え」の構造(増補普及版). 弘文堂, pp. 1-10.
- 藤山直樹(2010a). 続・精神分析という営み—本物の時間をもとめて. 岩崎学術出版.
- 藤山直樹(2010b). 「甘え」理論の対象関係論的含蓄. 特集：土居健郎先生追悼. 精神分析研究, **54(4)**, 345-352.
- 藤山直樹・松木邦裕・細澤仁(2013). 精神分析を語る. みすず書房.
- 蓮井千恵子(2022). 察してほしいという男性との中断した面接. 精神分析研究, **66(4)**, 208-212.
- 堀江桂吾(2011). 甘えを許容し難い女性との心理療法過程. 精神分析研究, **55(4)**, 390-395.
- 井村恒郎ほか(1968). シンポジウム 甘え理論(土居)をめぐって. 精神分析研究, **14(3)**, 2-23.
- 岩崎徹也ほか(2001). シンポジウム 甘え、自己愛、日本的治り方. 精神分析研究, **45(2)**, 103-139.
- 狩野力八郎ほか(2010). 特集：土居健郎追悼. 精神分析研究, **54(4)**, 3-52.
- 上別府圭子(2003). 母性の再考—父親から虐待を受けた女性と母親—. 特集 母性再考. 精神分析研究, **47(1)**, 29-38.
- 川名典子(1997). 心筋梗塞患者における依存をめぐる葛藤—リエゾン精神看護の役割—. 精神分析研究, **41(3)**, 259-264.
- 木下悦子(1992). 自己愛人格障害の治療(I)—患者の「特殊な現実」に対する共感的解釈について—. 精神分析研究, **35(5)**, 501-512.
- 北山修(編)(1999). 日本語臨床3「甘え」について考える. 星和書店.
- 北山修(2010). フロイト精神分析学との土居健郎の「格闘」あるいは「抵抗」について. 特集：土居健郎先生追悼. 精神分析研究, **54(4)**, 337-344.
- 熊倉伸宏・伊東正裕(1984). 「甘え」理論の研究—精神分析的精神病理学の方法論の問題. 星和

書店.

- 熊倉伸宏(1993). 「甘え」理論と精神療法：臨床における他者理解. 岩崎学術出版.
- 熊倉伸宏(1999). 甘えと欠如. 北山修(編). 日本語臨床3「甘え」について考える. 星和書店, pp. 113-128.
- 小林隆児(2012). 「甘え」(土居)と"vitality affects"(Stern). 精神分析研究, **56(2)**, 134-144.
- 中野幹三(1993). 甘えと原始的防衛機制—境界分裂病の治療経験より—. 精神分析研究, **37(2)**, 139-149.
- 中野幹三(1996). 『壁』と『穴』—ナルシズムの構造体をめぐって—. 精神分析研究, **40(1)**, 10-19.
- 西見奈子(2022). 指定討論. シンポジウム特集「日本的」とは何か：精神分析概念の創造. 精神分析研究, **66(3)**, 229-246.
- 西園昌久(1968). 甘え理論(土居)をめぐって. シンポジウム 甘え理論(土居)をめぐって. 精神分析研究, **14(3)**, 11-13.
- 西園昌久(1988). 甘えの二重構造—母子関係理論への提言—. 精神分析研究, **31(5)**, 261-273.
- 野々村説子(1992). 逃避型抑うつ患者の精神分析的な精神療法. 精神分析研究, **36(3)**, 245-252.
- M, Balint. (1952). *Primary Love and Psychoanalytic Technique*. 中井久夫・森茂起・枘矢和子(訳) (1999). 一次愛と精神分析技法. みすず書房.
- 岡田暁宜(2022). 日本の精神分析的臨床における「甘え」概念について—「日本的」について考える—. シンポジウム特集 『日本的』とは何か：精神分析概念の創造. 精神分析研究, **66(3)**, 208-212.
- 小此木啓吾(1968). 甘え理論(土居)の主體的背景と理論構成上の問題点. シンポジウム 甘え理論(土居)をめぐって. 精神分析研究, **14(3)**, 14-19.
- 小此木啓吾(1999). 甘え理論—その歴史的背景と発展—. 北山修(編). 日本語臨床3「甘え」について考える. 星和書店, pp. 3-28.
- 新福尚武(1968). 甘えの理論. シンポジウム 甘え理論(土居)をめぐって. 精神分析研究, **14(3)**, 3-5.
- 鈴木智美・妙木浩之(2022). シンポジウム特集 『日本的』とは何か：精神分析概念の創造. 精神分析研究, **66(3)**, 207-246.
- 竹友安彦(1988). メタ言語としての「甘え」. 思想 **6(768)**, 122-155.
- 高野晶(2022). 討論記録. シンポジウム特集 『日本的』とは何か：精神分析概念の創造. 精神分析研究, **66(3)**, 229-246.
- 竹友安彦(1989). 「甘え」をめぐるとの対決と、そのメタ言語的考察—土居健郎氏に答える—. 思想, **5(779)**, 100-124.
- 吉沢伸一(2011). 自己否定の『無限ループ』で苦悩する成人男性との心理療法過程. 精神分析研究, **55(4)**, 398-404.

(臨床心理学コース 研修員)

(受稿 2023年8月31日、改稿 2024年1月5日、受理 2024年1月10日)

日本の精神分析における「甘え」理論の展開と臨床実践

境 明穂

本稿は、土居が提唱した〈「甘え」理論/概念〉が、日本の精神分析臨床実践の中でどのように展開され、活用されてきたのかについて検討するという目的のもと〈「甘え」理論/概念〉の展開および『精神分析研究』誌における「甘え」を使用した症例報告を概観した。そこから、「甘え」の学術的意義や関心と比較して、そこから、「甘え」の学術的意義や関心と比較して、臨床的な活用の報告が目立たないことが見受けられた。その理由について、患者が抱える「甘え」の問題について質的な変化があること、治療者自身の「甘え」を扱うことが難しいということが影響しているのではないかと考えられた。しかし、それらの問題にも「甘え」の重要な視点が含まれており、「甘え」を現代的な精神分析臨床の中で扱う意義があるということを論じた。今後の課題として「甘え」が他の概念や理論に内包されるか、取って代わっている可能性もあるため類似概念との差異について詳細な検討が必要と考えられた。

The Development of “Amae” Theory and its Practice in Japanese Psychoanalysis

SAKAI Akiho

This paper presents a review of the development of “Amae” theory (Doi) and case reports of its use in “*The Japanese Journal of Psycho-Analysis*” to examine how it has been developed and utilized in clinical psychoanalytic practice in Japan. Reports of the clinical use of the term “Amae” are less conspicuous than its academic significance and interest. This was thought to be influenced by qualitative changes in the problems of “Amae” faced by patients and the difficulty for therapists to deal with their own “Amae.” However, these problems also contain important perspectives on “Amae,” and there is significance in treating “Amae” in contemporary psychoanalytic clinical practice. It will be necessary to examine the differences between “Amae” and similar concepts in detail, as “Amae” may be included in or replace other concepts and theories.

キーワード：甘え理論、土居健郎、精神分析、『精神分析研究』

Keywords: “Amae” Theory, Doi, Takeo, Psychoanalysis, “*The Japanese Journal of Psycho-Analysis*”